

朝を ひらく

人生、怒らなければ物事が前に進まないときがある。怒りは人の感情の爆発。このエネルギーが頑固な殻を破り、社会の刷新を果たしてきた。

日本人はなぜもっと怒らないのか、とアジアからの留学生の新聞投書があった。この留学生の国では、いじめられる側が怒って、いじめた側に反抗することとはあっても、いじめられた生徒が自らの命を絶つということが考えられない、日本人は勇気が足りない、という。

そう言えば、会社の上司も学校の先生も昔のように体をはって怒る姿を見かけなくなった。何かみんな優しくなりすぎている。怒らないでいけば、人とぶつからないですむから、と思っているのだろうか。

怒り方を学ぶ

永田 円了
真国寺住職



私事ながら、数カ月前怒りが爆発してしまった。「一体この瓦修理に何カ月かかっているのか。足場を組んだままお盆を迎えよ」というのか。上司をよべ！」。この一喝で、何カ月ももたついていたお寺の瓦修復作業

はその後1週間で完成した。高校生だった息子と近くの回転ずしへ行ったときのこと。カウンターの注文したすしがなかなか出てこない。どうしたのかと聞くと、忘れていたという。おまけにハマグリのみそ汁も忘れられた。

「ふざけるんじゃない、あなた方はプロとしての仕事をしているのか!もう帰る」。怒りがマンネリ化した空気を一掃した。父親が公の場で真剣に怒る姿を初めて目にして、ビックリしていた息子の顔が思い起こされる。言うべき時に、言うべきことを真剣に感情をこめて言う。これはただキレることとは一線を画する。

無口でただ我慢を美德とした私の父は、私を同じく我慢の子として育てた。でもこんなにも怒れる自分になったのは、怒り方を学んだからだと思う。怒るべきときにはしっかり怒るといふ考え方は、学ばなければ身につかない。

では、一度も本当に怒ったことのない人間が、どうしたら怒れるようになるのだろうか。白状すると、私の場合、怒りの全てを女房から学んだ。怒りが織りなす万華鏡のような結婚生活は、大学院レベルの学びの機会であった。彼女の怒りの原因は私自身であったり、ただ単にイライラしてキレたり……。お陰で正しく怒ることと、単にキレることの違いも学ぶことができた。最もたいへんだったことは、怒りをしっかり受け止めることであった。

言うべきことと真剣に